

---

# クワガタムシ

En

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クワガタムシ

### 【著者名】

EN

1

### 【作者名】

NZノード

N7980N

### 【あらすじ】

ヒーローと

正義と

深い恋

十八禁要素皆無だから張りなおします

(前書き)

えりかへなつた

「『黒く輝く体と  
二つの大顎を持ち

その勇ましさを見せつける甲虫  
そういう物に私はなってしまった』」

「何それ。ゴキブリの話？」

「クワガタだ！そもそもゴキブリに大顎は無い！」

桑野は友人の橘に叫んだ。

正確には、クワガタの話ではないが。

「またいつもの自慢話だろ？」

橘は呆れて言う。

彼の自慢話はいつもの事だ。

「これは正義の話であつて、自慢話ではない！」

「『お前の』正義の話はそのまま自慢話になるんだよ  
どうせ、いつもの自殺者を助けた、とか火事で逃げ遅れた人を助け  
た、とか不良をボコボコにした、とかだ。

「その力はお前の力であつて、そうでない物だろうが。たまに弱い  
者苛めの話もあるし、それが正義の話かよ」

「これは俺の力だ！そして俺は正義の男として当然の事をしただけ  
だ！」

鬱病の自殺者を助けた次の日に、また自殺しようとしたらしい。

未遂で済んだが。

今は社会復帰してゐるらしい。

最終的に助けたのは桑野じやなくて、その人を治した医者だ

火事の時もビルに飛び込んで女の子を助け出したまではいいが脱出  
の瞬間無駄にガラスに飛び込んで怪我をさせている。

不良に至つては、全治半年で済んだ者から、未だ意識不明の者まで  
いる。

橋は何度もそれは正義ではないと言つた。

対して、彼は自分の行為は完全に正義だと言い張る。根拠は非常に単純だ。彼はヒーローの、改造人間の力を使つているのだ。

「それで今日は何したの？また不良退治？」

「最近は不良を減つていてな、まあひとえに俺の活躍のおかげだな。そうではなく、昨日とんでもない物を見たのだ」

「何だよ。新しい改造人間か？」

「似たような物だ。恐らくは組織の怪人だろうがな、巨大な女が隣町の大学の建物を踏み潰していたのだ。愉しそうにな」

流石に橋は驚いた。

「え？どこで！？てか怪人が完成したの！？お前戦えよ！」

「急いで大学に向かつたが女には逃げられてな…。瓦礫の中に生存者がいなか探したが死体の一部も見つからなかつた。相当強く踏みにじつたのだろう…。許せん…！」彼の話から思い当たるのはX位だがテレビで見た感じ優しそうだったし、そもそも彼女は組織を裏切つている。

新聞では『悪の組織ファルコ、生物兵器の開発にまたも失敗。』と書いてあつた。

「そうか…。怪人が完成したのか…」

「奴らファルコを潰すのは俺の使命だ。この力は奴らを倒す唯一の剣だ」

「確か、改造人間は全部で十人いるから唯一じゃないよな」

「あいつ等はやる気が無い。この力を正義の為に使い、ヒーローとして戦つてしているのは俺だけだ」

橋は、その使い方もどうかと思つたが敢えて言わなかつた。

最近の桑野はそういう事を語つと怒り出して、変身して殴ろうとしてくる。

といふか先日、一人のクラスメートが殴り飛ばされた。謹慎は昨日までだつたからパトロールと称して、外出していたのだろう。

「いよいよこの時が来たか…。俺は明日あの怪人を倒しに行く。お前も来い！ヒーローの初戦を見せてやる」

明日から橋たちの高校は冬休みだ。

「いいぜ。どうせ暇だし。」

橋は、桑野の力を知つていて。

正直、巨人だろうが怪人だろうが桑野の敵ではないと思つていた。断つても桑野の事だから無理やり連れていくだろうし、怪人とヒーローの戦いをリアルで見れる機会なんてそうそう無い。

安全が保証されてるならなおさらだ。

彼に断る理由はなかつたのだ。

「ここに建物があつたのだ」確かに、巨大な足跡と瓦礫の山がある。桑野の話は本当だつたらしい。

「可哀想に…ここには逃げられなかつた人もいた筈だ。安心してくれ。あなたたちの無念は俺が果たす」

「つか、お前その女がどこに居るのか知つてんのか？」

「暫く探したが見つからなかつた。だが、帰りに寄つた駅前のラーメン屋で情報を掴んだ」

桑野は改造されてからエネルギー消費量が多いのか一般人の十倍は食べる。

だから、駅前のラーメン屋のジャンボラーメンは小遣い稼ぎにもなりちょうどいいのだ。

「資金を調達しようつとラーメンを食つに行つたら閉店していくな…」

店主に話を聞いた所、巨大な女に食い尽くされたらしい

「それで？」

「恐らく俺の資金調達を邪魔したのだろう。建物を壊したのも俺を怒らしておびき寄せる為だ。つまり狙いは俺だ。歩いていれば必ず見つかる」

橋はここにきて桑野についてきたのを後悔した。

要するに、彼は何も分かつてないのだ。

一気に帰りたくなつたが、そう言つと後が恐い。

橋は桑野に従つことにした。

一時間歩いても一時間歩いても見つからない。

クリスマスからの雪さえ無ければ自転車やが使えたのだ。

橋は寒さと歩き回つたことで疲れ果てていた。

元々小学校だつたらしい建物の近くで嫌になつた。

「もう…帰りたい」

「橋！貴様は死んだ人たちの無念を果たしたくはないのか…？」「そんなこと知るか！ヒーローじつには一人でやれよ！」

「何…！」

「何か手がかりであるのかと思つたら、なにが『狙いは俺だ』だよ！敵だつて狙つてるなら直接来るだろ！何でわざわざ怒らせたりラーメン食つてんだよ！」

「こうして俺を歩かせ、疲れさせる為の作戦だらう…」

「敵の作戦にわざわざ嵌つてんな！この勘違いヒーロー気取り！」

ここまで行つて橋は後悔した。

桑野は明らかにキレてる。

「所詮貴様も愚民か…」

「おい、ちょっと待てよ！それが正義のする事か？」

「黙れ！俺が絶対の正義なのだ！そして俺の敵である貴様は世界の敵…悪だ。貴様を消す…」桑野は右手を天にかざして叫んだ。

「チーンジ！ フアルマスク！ テン… レディ… ゴー…！」

桑野の体が光の蛹に包まる。

蛹にひびが入り、砕けた。

中からクワガタの怪人に変身した桑野が現れた。

「ファルマスク・テン！ クワッガー！！！」

「さつきからうるさい！」

建物の壁が開いた。

よく見ると扉になつてている。

中から巨人、Xが現れた。

「『X』…？」

橘は力無く咳く。

「貴様つ…！ こいつと知り合いか！ 思つた通りだな！ 橘！ 貴様もフ  
アルコの人間だ！」

橘は、初めて桑野が本当に壊れていることに気づいた。

「死ね！ フアルコ！ クワッガーキイック！」 桑野の必殺技だ。  
足にエネルギーをまといそのまま蹴る。

「ひ…」

人間に当たればその体は完全に消滅するだろう。

橘は目を瞑つた。

衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けると何かが橘を包んでいた。

「Xの手…？」

Xは橘を包んだまま立ち上がった。

手を顔の前まで近づけて問いかける。

「危なかつたね。大丈夫？」

「は、はい…」

「俺の必殺技が効かない！？」

Xは桑野を見下ろした。

「君…？さっきからギャアギヤア馬鹿みたく叫んでたのは？」

「俺は悪に答える口など持たん！」

「悪？この子、ただの高校生だよね？あの蹴りが当たつたら死ぬよね？君、もしかして自己紹介してるの？」「直接聞けばわかるぞ。そいつは極悪人だ！」

Xは手の上の橋を摘み上げて聞いた。

「…君何したの？万引き？それとも殺人？正直に答えないと指を放すよ」

「何もしてません！本当です！」

「ええい！三文芝居は止める！貴様等はファルコの仲間同士だろうが！」

「はあ！？」

「正義の鉄槌を受ける！クワッガーシュート！」

桑野は凄いジャンプ力で飛び上がり、Xの体にエネルギー弾を放った。

Xの体が煙に包まれる

「正義は…勝つ！」

桑野がそう言つた直後に後ろから何かがぶつかり、吹き飛んだ。

「何！？」

Xが桑野を軽く蹴つたのだ。

「今何かした？」

言いながらまた桑野を蹴る。

「くそおー！もう一度！クワッガー…」

それより早くXの右手がから巨大な銃身が現れた。

Xは何も言わずに光線を放つ。

「俺の最強技のクワッガーシュート以上の威力だと…！？」

Xはクスッと笑つた。「何が可笑しい！？」

Xは桑野を無視して、桑野に聞こえ声で左手の橋に話しかける。

「あれが一番強いんだって！？あれは僕の中じゃむしろ弱い方なの

に

「は…？」

「何…だと…？」

Xは再び足下の桑野に目を向けた。

「あー君まだいたの？さつさと逃げればいいのに馬鹿だね～」

「ヒーローが悪に背中を見せられか！ウオオー・クワツガアー・キイ  
ーックアー！」

「少し強く蹴るよ。えい！」

「グアアア！」

橘は桑野が負ける筈がないと思っていた。性格は最低だが、その力は最高クラスだと思っていた。

だから、あまりに一方的にやられる桑野が信じられなかつた。

桑野は完全に気絶している。

上から見るとクワガタの死骸みたいだ。

「はあ…君弱すぎ。つまんないよ。まあ聞こえてないか」

桑野は決して弱くない。

おかしいのはXの方だ。

Xは桑野を捕まえて、自宅に戻る。

左手には橘を握つたままだ。

「ええ…？ちよつと…！？」

「彼氏が今日だけ寒家に帰つててイライラしてたんだ。今田圭二に泊まつていってよ」

「え…」

橘は正直嬉しかつた。

桑野から自分を助けてくれた美少女の家に泊めてもらえるなんて夢のようだ。

部屋の中に一人の男の存在を認めるまでは。  
彼らは倒れて動かない。

心なしかボロボロに見える。

「ほら、一人とも起きて公平はこれくらいじゃ氣絶しなかつたよ

「…カンベンシテクレ」

「口口サレル…」

「だから、僕は誰かを苛めるのは好きだけど殺すのは嫌いなんだつて…弱いなー一人とも。けどこれ以上は死んじゃうかもしれないしな…。これじゃ物足りないよ」

「あの…」

「そういうえば君らがいたね。けど一人気絶してるか…まあもう一人いるし我慢しようかな」

「い、苛めるつて?」

「そのままの意味だけど?あ、一人とも休んでいいよ。この子が動かなくなるまで」

「動かなくなるまで!?」

「アハハ。殺したりしないから安心して」

「嫌だ!助けて!」

「何言つてんの!?!さつきは僕が君を助けてあげたんだよ!…次は当然君が僕を助ける番でしょ!…」

「そんな無茶な…」

「君、僕に逆らうの!…?」

「え?」

「…イウコトキイトイタホウガイイゾー」

「何なら今すぐこの子たちより酷いことにしてあげてもいいんだけど…。もう一度聞くよ?君、僕に逆らうの?言つこと聞くの?たく泣いてちゃ分かんないじゃん。さあ早く答える!」

終わり

(後書き)

橘くん可哀想です  
行き当たりばつたりで書くからこんな酷いことになりました  
だが、私は謝らない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7980z/>

---

クワガタムシ

2011年12月25日17時45分発行